

新潟産業大学報

青海波



第12号

発行日 平成12年5月31日
 発行集 新潟産業大学
 新潟県柏崎市軽井川4730番地
 TEL 0257-24-6655
 FAX 0257-22-1300

新世紀への教育の再建のために

学長 内田安三



21世紀にむけての新しい胎動を期待し

ながらも、わが国の社会で、経済、行政、さらに文化の様々な分野での閉塞感、崩壊感を感じざるを得ないことは否めない。20世紀という時代が科学技術の飛躍的な発展と工業化社会への転換、その経済活動が、石油資源に恵まれたイスラム社会の復権をもたらし、自由経済体制が革命、戦争なしに社会主義体制を崩壊させ、ソ連邦を解体させる事態をまねいている。さらに工業化社会自体が物供給から情報化に転換し、世界的なグローバル化の下で新しい覇権の形態が競われている。この中で新しい社会での価値観、人生観の混迷が今日の閉塞感をもたらしているとも考えられる。このことは、個々の家庭、家族での人間関係でも同様である。教育の分野でも、当然のこととして、新しい時代に対応し、先導すべきものとしての変革が求められている。今日、様々な視点、教育の段階からの提言がなされている。しかし、その改善が単に教

育方法論にとどまってはならないことに留意すべきである。それは我々が環境、公害の問題を考えるとき、その解決をつねに技術開発に依存するべきではなく、環境を保全し、公害を生じさせぬ人々のライフスタイル、社会といったバックグラウンドの形成を問わねばならないのと同じことである。我々がどの様な社会を夢見、どのような人生を望ましいと確信するのか、またもしもそのようなことが確信し得なくても、いかにしてそれを明確な態度で摸索しているのか、それを自覚し得なくては教育の場に成立し得ないのではなからうか。今日の教育の場の混乱と荒廃は、あまりにも急速に展開した人間社会の肥大と機能の拡大、さらにさまざまな歴史のうねにある民族、地域の画一的交流、価値観の混乱にあるともいえる。科学技術に支えられた工業化社会、それにより生じる市場経済、きわめて鮮明な拝金思想、一方ながい風土の中で培われた宗教、思想、習慣からくる価値観、これらのカオスのなかに我々の生きざま

の不確かさがあり、これが教育における無力感を生んでいるともいえる。勢い、目的方法論の明確な自然科学分野を対象とし、また手法とする教育分野が振興されることになる。しかし、これは一見、高等教育が振興されたかに見えても、実態は初等、中等教育での活性化、さらに理数教育の崩壊にはほとんど無力である。その前に子供達が学ぶ意欲を喪失し、子供社会の形成にすら無力になっていく。学級崩壊、いじめ、若年者の仮想空間的反社会犯罪、これらの問題について我々は改めて、我々人類という生物集団の社会とは何か、人類の継承、蓄積した文明、文化とはあらためて問いなおすべきである。そして、とくに、その変遷と変化に留意すべきである。そこには1000年変化せぬ思想、宗教が根底に流れたこともあろうし、今日の情報科学技術のよる変化をもたらすものもある。ここでわれわれのおちいった一つの錯覚、進歩に対する無定見の信頼に気付かねばならない。20世紀の我々の時代でそのもたらす経済効果に幻惑され、発展に対する時間の制御を失念したこと、これが科学技術の世紀といい、人類史上最



大の繁栄の時と自賛しつつも、多くの騒乱、環境の地球規模での破壊、さらに、未来の食料、エネルギーの枯渇の不安をもたらしているのも、この点にあるといえる。教育の改善、再建は環境、資源の問題が単にそれを解決するであろう新技術を待望することのみでなく、我々の社会の生活パターンの変革なしには解決し得ないように、単に教育の場での方法論ではなく、我々自身の、そして世代を共有した人生、社会の価値観の再構築なしには有り得ない。またそのためには大学は学生にとどまらず、他教育機関、社会にその接点を求めなくてはならない。自らを語りうるようにならねばならぬ。そしてそのために拙速に走らず、絶え間ない努力をせねばならない。

当面する課題と方策について

経済学部長 竹内明眸

二十一世紀にむかい、本学は時代と変化に適応する個性的で

特色ある地域の大学であり、なおかつ国際的でもある大学づくりを目指そうとしています。大学像としての地域性と国際性では、一見矛盾しているようですが、今日の情報化、グローバル化という社会環境を考えれば、それらは同一方向性の相互に補完的な追求目標と

いえると思います。

経済学部としては、今後国際化を指向しながら、地域の中核的教育機関としての存立基盤の確保を最重要課題として臨もうとしています。その際、特に学生に対する教学の充足度、学園生活の満足度が、最も存立基盤に直接的に影響する要因と考える視点から、当面する課題や方策について、次にあ

今日における

大学の課題と責務

人文学部長 田中榮一

いま、大学は、国際化、情報化、高度技術教育、はては少子化等による、自らの改革とともに、何かもつと根本的な大きな課題と責任に直面させられているように思えます。

そのことを突きつめて考えてみると、いわば人材育成の在り方に、関しての再確認を迫られている、といったよいかと思えます。

そしてそこには、不況とカリス

トラといった社会的な状況とは決して無縁ではないわけですが、ほとんど連日のように報じられる、これまでの常識をはるかに越える、人間性や人格の存在を疑わせる数々の事件に起因する日本全体を覆う危機的状況から、とりわけ教育的いとなみにたずさわるすべての者に対しての、問いかけがあるように思われます。

ではいかにすべきか、その取り

げてみたいと思います。①一部導入を図ったセメスター制を一層促進し、集中学習による教育効果を期すには、年間の単位履修制限を強化すると共に、講義科目に演習的要素を加味するなどの条件を整備してゆく必要がある。②これまでに就職進路とカリキュラムの結合によるコース制を設け、修学過程を系統的、段階的に見通せるよう図り、動機づけを高める手立てを講じてきたが、さらに就職での成果を上げるためには、アカデミックな正課教育以外に、資格取得を主目的とするエクステンション教育をインスクール体制によって充

実させてゆくことが必要と考えられる。③とかく「知識集積型教育」といわれる現状に対して、提案されることは、実践的であり、「思考開発型教育」の条件を具えていると考えられる科目の設置である。例えば、経済学領域では「デリング・ルーム実習」、経営学領域として「シヨップ経営実習」等が考えられる。これらは事前に経済・経営領域への関心を触発し、動機づけを高める効果が期待できる。④来年度以降の留学生の定員増、さらにセメスター制導入を契機とする秋期の入学・編入学の可能性を視野に入れながら、日

本語科目を中心とする教学体制の整備をすみやかに行うことが必要である。⑤教学体制と共に、本学施設の拡充、改善について吟味された財政的妥当のもと、年次計画に従って着実に進めることが必要であるが、その際主眼とすべきは学生の目線に合致し、感性に調和する環境づくりを行うということである。

右の事項で主に直近の課題と対応の試案を提示しましたが、今後さらに中期・長期的展望に拠る施策を練り上げ、総合的な実行計画に沿って展開を図ってゆくことが大切と考えます。

組みと達成については、正直言つて実に容易でない道程が予想されます。それゆえ多くの大学人からのさまざまな発言が目に入りま

大総長)は、人間の精神性がしっかりとあるべきこと、その獲得と鍛練を目指すことが「教養の根本」と説いております。

つまり、事を行うに当たってその基盤となるべき人間性そのものの鍛練と涵養の重視、ということでしょうか。ふかく同感を覚えるものであります。それにしても、学問の先端を行くとされる東西両大学の長が、かく強調するほどの事態が切迫しているということでしょう。

志向されております。今日の状況は、とりわけてこの点に重きをおいた意識的な取り組みが肝要ということであります。たとえば、当学部の環日本海文化学科における異言語、異文化の習得などの場合、一歩一歩進む粘りづよいたまぬ精神力が不可欠ですが、達成のあとの鍛えられた人間性の結実を見るとき、特にこの観点の重要性を実感いたします。

す。たとえば、この四月の某新聞紙上に、蓮見重彦氏(東大総長)は、二十一世紀の学問の中心は、環境、生命、情報等の諸科学で、時間をかけないと見えてこない学問であり、早熟な天才型より粘りづよく取り組める人材が必要であり、それができることが「教養の一つの形」と指摘し、また長尾真氏(京

もちろん、これまでもそうであったように、すべての学問的な行為そのものの過程に、知識や技能の習得とともに全人格的な形成が

私達は、これからもそうした認識と確信をもって、一人ひとりの学生諸君と向き合っていくことをねがっております。

新潟工科大学との単位互換制度について

その目的と制度の概要

教務部長 沼岡 努

新年度から新潟工科大学（以下工科大）との間で単位互換制度―大学間で学生を相互に派遣し合―、他大学の授業科目を履修し、所属大学での単位に取り入れることができる制度―がスタートしました。この制度は本学が工科大と本年1月に締結した「単位互換に

関する協定書」に基づくもので、県内では大学間の新たな連携の具体的試みとして注目されております（4月20日NSTテレビで紹介）。以下この制度について、これまでの経緯を踏まえながら、その目的と概要を紹介したいと思います。

平成3年の大学設置基準の大綱化以来、各地で単位互換実施の気運が次第に高まってきました。本県においては平成10年、「県内高等教育機関単位互換検討会」が発足、その実現可能性が検討されました。そこでは、学間に意欲的な学生は複数の大学が育てる、県内を4ブロックに分け、ブロック単位で今後可能性を探っていく、など幾つかの主要な提言がなされました。こうした動向を視野に入れ、

本学では荊木久彌前学長主導の下、工科大との単位互換の方針が全学教授会で合意され、教務部スタッフが12年度実施に向けて検討を重ねてきました。こうして冒頭申し上げた単位互換制度がこの4月スタートしたのです。

大学「大衆化」の今日、益々多様化していく学生の知的好奇心を開講科目数に自ずと制約のある個々の大学が充足させることはなかなか困難です。各大学が所有する知的資源を相互利用できる仕組み、即ち単位互換制度の積極的運用により、こうした学生の知的欲求はかなりかなえられる筈です。

工科大が今年度開講している科目の中には、「バイオテクノロジー」「くらしと環境」「科学技術史」等、興味深いものが多数あります。工科大との交流を通じ、本学学生が理系大学の異なる学風、異文化を体験し、新しい価値観を持ち帰って来ること、また受入れ側としても、工科大生が授業に出席すること、本学学生に良い刺激となり、延いては大学活性化にも繋がるものと期待しています。

以下、工科大との取決め事項について骨子を紹介します。

- (1) 両大学は、それぞれ受入れた学生を「特別聴講学生」として扱う。
- (2) 特別聴講学生となる資格者は、2年次以上の学生とする。
- (3) 特別聴講学生が履修できる授業科目は、受入大学が開講を認めた科目に限る（両大学共、今年度は講義科目に限定しています。本学が両学部あわせて155科目、工科大が39科目を開講しました）。
- (4) 特別聴講学生の受入数は、各授業科目毎に受入大学が定める（本学の場合、開講科目1科目につき10名の工科大生を受入れます。工科大の場合は科目により受入数が異なり、5〜30名となっています）。
- (5) 特別聴講学生が取得できる単位数の上限は、派遣大学が定める（本学経済学部の場合、上限は12単位、人文学部の場合、上限はありません）。
- (6) 特別聴講学生の入学金、授業料は相互に徴収しない。

国際交流センター開設

国際交流センター長 坂東 淳悦

新世紀を目前に控え、これからの社会は、真に豊かな未来の創造と自然や社会との調和ある発展を計るために、多様で且つ新しい価値観や文化の呈示を求めており、高等教育を担う大学は、これ迄以上に知的活動の強化に努めるとともに、グローバルな視点に立った教育体制の充実に努力しなければならぬ。

大学と国際交流協定を締結しており、それにもとづき教員や学生の相互派遣等を積極的に実施している。とりわけ、ハルビン、ハバロフスク及びノーザンアリゾナへの短期留学は、学生間でもその評価は極めて高く、帰国後の私費による再度の留学にみられる如く、その後の学生生活に好結果をもたらしており、今後ともその推進に努めたいと考えている。

そこで本学では、国際交流の推進を教育・研究の知的水準の向上策と位置づけ、そのための有効な組織として、今年度当初より国際交流センターを発足させることとした。

他方、本学の留学生は、経済・人文の両学部4学年で5ヶ国104名を数えており、卒業生も100名にも及んでいる。留学生を通じた国際交流は、本学は言うに及ばず、この地域にとつても、国際理解の推進と国際協調精神の醸成に多大の貢献をしており、母国との友好関係の強化のための懸け橋として大いに機能しているところである。

この組織は、本学の教育・研究に関する国際交流を円滑に推進すること及び留学生に対して留学目的を達成できるよう、その支援体制を整備充実させることを目的としたものであり、業務実施上の迅速性やコミュニケーション系路の一元化を確保するとともに、留学生に対してより一層充実した教育環境を構築しようとするものである。

善等、本学自身の受入れ体制の整備充実にも努めるとともに、関係諸機関との連携を密にしながら、その目的達成に積極的に取り組んでゆきたいと考えている。



さて、本学では、現在4ヶ国6

卒業式

希望を胸に、

社会へはばたく

平成12年3月19日(日)午前11時から
柏崎市市民会館大ホールにて第
9回卒業式が盛大に挙行された。

式では卒業証書が卒業生代表に
授与されたのち、学長式辞・卒業
生謝辞など厳肅な雰囲気の中で進
行した。式終了後経済学部は各ゼ
ミナール指導教員、人文学部は卒
業論文指導教員から個人個人に卒
業証書が授与された。

会場を移して恒例の謝恩パル
ティーが在学生で組織する卒業委員
会主催で開催され、卒業生は、恩
師や在学生と思ひ出話に花を咲か
せ、新たな旅立ちを前に、決意
を新たにしていた。
平成11年度の各賞受賞者は次の
とおり。

●学長賞

経済学部 篠田 英実

人文学部 齊藤由紀子

●文化・スポーツ功労賞

経済学部 石崎 哲也(卓球)

大久保洋介(卓球)

●国際交流功労賞

人文学部

グルホア・タチヤナ

鮎尔吉徳

坂井一之

部活動・新入生学外合宿研修・ 留学制度について

学生部長 廣川 俊 男

西暦2000年。新潟産業大学
が開学して13年目に入りました。

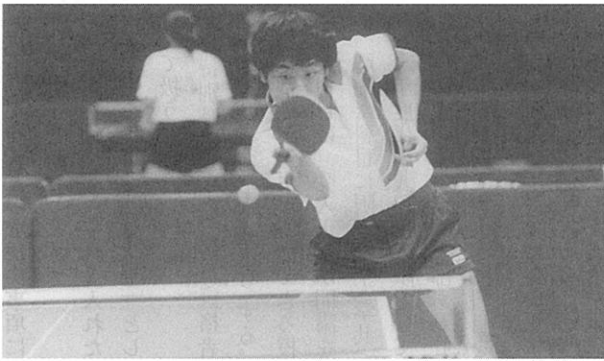
「新設された」のイメージから脱
皮し、「伝統ある」大学に成長し
ていく節目の年にしたいもので
す。ここでは、本学において既に
何年もの実績を持つ、部活動・新
入生学外合宿研修、留学制度につ
いて、現状を報告致します。

◆公認部の活動状況◆

本学には、陸上競技、水泳(含、
水球)、硬式野球、バスケットボ
ール、バレーボール、サッカー、
卓球、硬式テニス、ソフトテニス、
バドミントン、柔道、剣道、弓道、
空手道、少林寺拳法、ボクシング、
基礎スキー、ライフセイビングの
18の運動部、及び、茶道、吹奏楽、
軽音楽、ESSの4つの文化部、
計22の公認部(大学と学友会から、
活動に対する補助を受けている)
があります。
各部からは、授業時間割が5限
体制になり17時25分終了となった
ため、十分な活動時間が取りにく
いといった苦情も寄せられていま

すが、それぞれ工夫を重ねながら
活動しています。

99年度の運動部においては、体
育館、グラウンド、テニスコート
などの施設を複数の部が時間を分
け合って活動しているなどのマイ
ナス条件を、公的スポーツ施設の
積極的利用や休日返上の厳しい練
習などで克服し、卓球、少林寺拳
法、空手道、水球、ライフセービ
ングの5つの部が全国大会出場を
果たしました。特に、卓球部は春



季・秋季の北信越学生卓
球選手権大会の男子団体
で連続優勝、同シングル
スやダブルスでも優勝や
上位入賞を果たし、北信
越地区ナンパワンの実
力を遺憾なく発揮しまし
た。

主な戦績は以下のとお
り、

【卓球部】

・第69回全日本学生対抗
卓球大会 男子団体予
選リーグ2位、決勝ト
ーナメント進出。
・第66回全日本学生卓球
選手権大会 男子ダブ
ルス 大久保洋介・鳥

羽羽樹組 2回戦進出。石崎哲
也・石橋保組、石川貴弘・村越
祐介組、工藤基、松田大組 出
場。男子シングルス 大久保洋
介、石橋保 2回戦進出。石崎
哲也、石川貴弘、村越祐介、工
藤基、成田慎多郎 出場。

【空手道部】

・第43回全日本大学空手道選手権
大会男子団体戦出場。(北信越
大会男子団体 3位)。同個人
戦 広川剛 出場。

【水泳部(水球)】

・第75回全日本学生選手権大会 出
場(8年連続)

【少林寺拳法部】

・少林寺拳法全国大会組演技一般
三段の部 伊藤斉・伊丹裕三組
出場。



【ライフセイビング部】

・第14回全日本学生ライフセービ
ング選手権大会 出場。

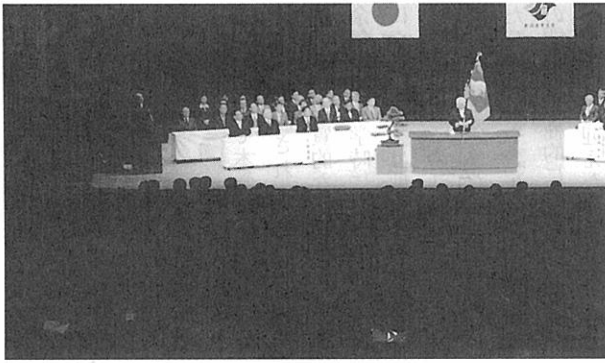
文化部も、学園祭での企画・発
表や他大学との交流など、有意義
な活動を展開しています。
また、公認部の他にも、軟式野
球やアウトドア、読書やゲーム、
ボランティアなどを通じて親睦を
深める目的で組織されたサークル
が楽しく活動しています。

入学式

新たな学生生活の はじまり

平成12年4月5日(水)午前11時から柏崎市民会館大ホールにて第12回入学式が挙行された。式開始1時間ほど前から続々と緊張した面持ちの新入生や笑みをたたえた父母が集まった。

式では、学長式辞、来賓の祝辞に続いて、新入生を代表として経済学部 山本大輔君が力強く学生生活への抱負を述べた。式終了後は、翌日からのガイダンスの日程などが連絡され、新入生達は今後の大学生活に想いを馳せていた。



◆新入生学外合宿研修◆

すでに10年を超える伝統行事として定着した新入生学外合宿研修ですが、この間、色々な試行錯誤が繰り返されてきました。最初の頃は、雪がたつぷり残る妙高・赤倉を舞台に実施されました。腹を抱えて笑えるクラス対抗演芸会やバレーボール、綱引き、エアロビクスなど汗をかく企画などを盛り込んだものでした。

人文学部の発足で新入生の数が600に膨れ上がったことから大きなホテルを求め、湯沢に移動しました。デラックスなホテルと全員が一緒に過ごせる楽しさと利便性は魅力的でしたが、片道2時間という時間のロス、人数が多すぎることから生じる問題点も指摘されていきました。

様々な角度から検討した結果、今年度は地元柏崎で実施することとしました。柏崎も県内屈指の観光地であり良いホテルもたくさんあること、できるだけ早く柏崎に慣れてほしいこと、必要なオリエンテーションなどは全て大学内で行い、ホテルでは懇親に十分な時間を費やせること……などがその理由でした。経済学部が3つのホテルに分散した、コレクションビルで時間を持て余してしまっただけ……などの課題も残りましたが、

参加者のアンケートには「友達の輪が広がり良かった」の声がたくさん寄せられました。生の声をもっともつとお寄せ下さい。

◆海外短期留学制度◆

新潟産業大学には現在提携を交わした海外の4つの大学への留学制度があります。現地の大学で、語学講義を中心に受講し成果を上げることで、学生や教職員、更には

実施校	出発月	期間	本人負担費用
国立ハルビン師範大学 (中国)	2月	約3ヶ月	約11万円
国立黒龍江大学 (中国)	同上	同上	約16万円+食費
州立北アリゾナ大学 (アメリカ)	8月	約1ヶ月	約55万円
国立ハバロフスク経済法律アカデミー (ロシア)	5月	1週間	9万円

※本人負担費用の額は旅行保険料を含めたおおよその目安です。但し、空港までの交通費は含んでいません。

国からの留学生と交流を深めること、生活の中で異文化と直に接すること、そして国際的視野をひろげることなどが目的となります。参加者のほぼ全員が「大変有意義であった」と答える「留学」には、やはり日本を離れることでしか得ることのできない何かがあると思われます。一人でも多くの学

生にチャレンジし参加してほしい制度です。費用をすぐに用意できない人も、卒業生で組織されている新潟産業大学校友会からの無利子貸付制度を利用することが出来ます。出発日の2〜3か月前から、掲示板やチラシ等を通じて募集が始まりますので興味のある学生はお見逃しなく。

▼海外短期留学
—黒龍江大学にて—



▲新入生学外合宿研修

今年度の公開講座・講演会について

生涯学習センター所長 鍋田英彦

早いもので本学に生涯学習センターが設置されてから一年経つが、その実質的な活動はおよそ十数年前の開学時にさかのぼることになる。本学は地方の大学としては早くからこの活動の大切さを認識し、さまざまな市民を対象にした公開講座や講演会を企画し、その開催に積極的に取り組んできた。二年目を迎えた今年度のプログラムをお待ちしている。

ラムは次のようなバラエティに富んだ内容を予定している。この内の聴講講座とは大学で開講している正規科目を一般学生と共に学んでもらうプログラムである。

これらの取り組みを通して、地域社会に開かれた大学、市民に親しまれる大学を目指していきたいと思っっている。多数の市民のご参加をお待ちしている。

今年度の各種公開講座・講演会

○前期公開講座

- 「環境経済学講座」(4回開講) 経済学部講師 阿部雅明
定員70名 受講料2,000円 会場/柏崎市産業文化会館
- 「水泳指導法講座」(4回開講) 人文学部教授 廣川俊男
定員20名 受講料2,000円 会場/柏崎市スポーツハウスプール
- 「源氏物語講座Ⅲ」(4回開講) 人文学部教授 川村裕子
定員140名 受講料2,000円 会場/柏崎エネルギーホール

○後期公開講座(聴講講座)

- 「マーケティング論」(4回開講) 経済学部教授 鍋田英彦
 - 「異文化コミュニケーション」(4回開講) 人文学部教授 梅澤精
 - 「日本美術史」(4回開講) 人文学部助教授 片岡直樹
 - 「比較文化論」(4回開講) 人文学部助教授 梅比良眞史
 - 「経営組織論」(4回開講) 経済学部助教授 高橋成夫
- 各々定員20名程度 受講料2,000円 会場/新潟産業大学

○公開講演会(第18回)

講師:坂本春生 セゾン総合研究所理事長(元通産省札幌通産局長)
 演題:「これからのくらしと流通はどのような」
 日時:平成12年6月3日(土)14時~15時30分
 会場:柏崎エネルギーホール
 定員:150名
 受講料:無料 ※詳細は各パンフレットを参照ください。

平成十二年度入試を終えて

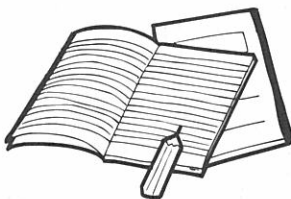
入試部長 山崎一輝

平成十二年度入試は、指定校推薦のウエイトが増加した。入試委員会では、あらかじめ指定校推薦の重視を打ち出しており、高校側からの推薦出願数も増加した。本学だけではなく、多くの大学で、推薦入試やアドミッション・オフィス型入試の重要性は高まっている。入試の多様化とも言える現象で、偏差値一元主義からの反省とも言われるが、一方基礎学力の低下も危惧されているのは周知のことである。その意味で、従来型とも言える一般入試の重要性は今後も変わらないのである。それでも、多様化の時代に合わせて、大学も柔軟な対応が求められているわけだ。

一般入試で求められるものが「学力」であるとするれば、アドミッションズ・オフィス型入試の方は「学習意欲」であり、推薦試験の方は「高等学校における総合実績」にあるといえる。本学において指定校推薦の重視を打ち出した背景には、各高等学校とのつながりを重視すると言う将来的な方向性にある。受験勉強は苦手であったも、こつこつと努力をするタイプと言うのは案外多いものである。指定校推薦を通して、各高等学校とのつながりが深まれば、本学志望者は、受験勉強よりも、もっと手間隙のかかる「基本的な課題」に取り組みることができるわけである。昨今勉強嫌いが多くなっているのは、そのところが手薄になっているからである。じっくり取り組めば、どんな教科も楽しいものである。そして、大学で学ぶべきことも、その点にある。大入試後は、もはや入試のための勉強ということはありえないからである。嫌いなものであろうと、意義をつかめば必ずやり始めるものである。大学が学問の場であることを想えば、勉強嫌いが増えていることは重大事だ。どうして、こんなにも勉強が嫌いになるか問題にすべきであろう。いまや難関大学を除いて、大学も狭き門ではなくなっている。大学に進学したい人はとりあえず進学することによって、勉強嫌いが減ることによって、社会的に見ても惜しいこと

であると言える。また、さほど勉強嫌いでもないが、自分には大学進学が無理であると勝手に思い込んでいる人も多い。これらの多くの人々にチャンスを与えることも、人材の発掘・育成と言う点から、是非必要なことである。

そこで気になるのは、入学後のプロセスの検証である。紙数の関係で一例にとどめるが、一般論よりは具体的な事例の方が望ましいとも考えて付け加えたい。先日、卒業生のひとりが大学に遊びに来た。実は研修が終わったばかりでようやく休みが取れたと言う。卒業後一ヶ月にも満たない。研修はどうだったと聞くと大卒の方が多かったが、高卒もいて相当な人数で合宿をしたのだと言う。大学別では本学は多い方だったとのこと。私は興味があつていろいろ尋ねたが、自身のことを含め大学全般に関して、総じて肯定的な評価をしていった。まあ、だからこそ大学に遊びに来たのだらうとは思つたが、それでも妙にうれしかった。



年次かさなる就職・採用活動

……就職課から

△ミレニアムの就職状況

三月三十一日、九九年度最終の就職決定者（経済学部男子）が出た。年明けに軒旋した磁気テープ御販売の会社に採用が決まった。この年、「秋は音無し、期末ギリギリの駆け込み求人」に、就職をあきらめなかった学生たちが、滑り込みセーフで社会に巣立った。

休日をはさみ四月三日、人文学部女子学生から二〇〇〇年度最初の内定報告あり。昨年の暮れにリクルートナビからエントリーし選考を経て内定。首都圏の医療機関だが、勤務地は新潟市。第一希望の医療関係の仕事ということで活動はこれにて終了。企業の採用活動早期化と未内定学生の就職活動長期化により、四年と三年のリクルート年次が重なっている。

九九年度も、不況脱出、雇用不安解消とはいかなかった。世紀末日本、政治・経済・社会・教育、各方面でこれまでの膿を出し切らないと、新世紀の扉は開かないのかもしれない。大学生の就職もかつてないほどの厳しさ（大卒文系求人倍率〇・八三倍）を経験した。本学は、就職希望率八〇％台を維持しつつ、全国の就職率を上回る事ができたが、求人数一〇九六社、前年比二・三・四％減と就職難は同じ。また、二〇〇〇年度、各企業の採用予定数や選考の早さ

を見るにつけ、未だ夜明け前。「短期集中、アツという間の店じまい」に変わりはなさそうだ。

△卒業生が就職を応援

さる、二月十六、十七日、高柳町の新潟県立こども自然王国で一泊二日の「就職合宿研修会」を実施した。今年で四回目となるこの行事、本学の就職活動を最先頭で引っ張ってくれる学生を、OB講演、個人面接、ステージ上での模擬面接、業種別懇談会、グループ討論等で鍛える。長引く就職難から、今年は初めて、〆切日前に募集定員八〇名の枠が埋まり、学生の危機感の高まりがうかがえた。

支援する側の参加者は就職委員の教員六名、就職課職員五名、就職が決まった四年生十六名に忘れてならない卒業生。今年も忙しい中を三名が駆けつけてくれた。積水ハウスの鈴木さん（九七年卒）は、「夢を顧客と共に造る住宅営業の醍醐味と良い物は売れる営業マンの自信」を披露。県内製造業ヨシカワの中川さん（九七年卒）は、「総務には裏方として沢山の仕事がある。学生時代には想像もつかない。だからこそ会社訪問は大切」と。また採用のアシスタントとして学生のマナーについても苦言を呈してくれた。富山銀行の濱田さん（九八年卒）は、「金融の勉強が好きでない」と銀行の仕事は楽しめない」とアドバイス。更に、グループ討論では、「ペイオフ解禁二年延期の影響」

をテーマに司会もつとめてくれた。実は、鈴木さんと濱田さんは、この合宿の経験者。第一回合宿で鈴木さんは四年サポーターとして協力。濱田さんは、その合宿に三年生として参加し、四年次にはサポーターとして協力してくれた。在学生にも卒業後、是非この合宿にもどってきてほしい。

〇〇年度採用予定のある企業五十社を招き、「合同企業説明会」を開催。雪国には奇跡の日本晴れ。会場のカフェテリアは、三〇〇名を超える学生（他大学数名も混じる）の熱気に溢れた。この日、大



【表①】'99年度 本学就職状況（2000年3月31日現在）

		*1	合計	男子	女子
両学部合計	就職決定率	87.6% (90.4%)	86.4% (89.3%)	86.4% (89.3%)	93.4% (98.0%)
	就職希望率	80.1% (81.7%)	78.4% (82.3%)	78.4% (82.3%)	89.7% (77.8%)
経済学部	就職決定率 *2	88.6% (90.2%)	87.6% (89.2%)	87.6% (89.2%)	94.7% (100%)
	就職希望率 *3	81.2% (83.1%)	79.9% (84.5%)	79.9% (84.5%)	90.5% (72.2%)
	就職者数	234人 (249人)	198人 (223人)	198人 (223人)	36人 (26人)
	就職希望者数	264人 (276人)	226人 (250人)	226人 (250人)	38人 (26人)
人文学部	卒業生数 *4	325人 (332人)	283人 (296人)	283人 (296人)	42人 (36人)
	就職決定率	84.7% (91.1%)	82.7% (89.6%)	82.7% (89.6%)	91.3% (95.7%)
	就職希望率	77.2% (77.6%)	74.3% (75.3%)	74.3% (75.3%)	88.5% (85.2%)
	就職者数	83人 (82人)	62人 (60人)	62人 (60人)	21人 (22人)
留学生計	就職希望者数	98人 (88人)	75人 (65人)	75人 (65人)	23人 (23人)
	卒業生数	127人 (116人)	101人 (89人)	101人 (89人)	26人 (27人)
	大学院等進学者数	13人 (4人)	10人 (3人)	10人 (3人)	3人 (1人)
		*4	27人 (33人)	18人 (20人)	9人 (13人)

*1: () 内は、前年同日の計数。
 *2: 就職決定率=就職者数÷就職希望者数。卒業前が内定率、卒業時から決定率。
 *3: 就職希望率=就職希望者数÷卒業生数。
 *4: 経済学部男子留学生1名は、留学生計に含む。

【表②】'99年度 全国との比較（2000年2月1日現在）

		合計	男子	女子
全国四大卒	就職内定率	81.6%	83.8%	77.1%
	就職希望率	66.4%	64.2%	71.6%
全国私立大学	就職内定率	81.0%	83.5%	75.8%
	就職希望率	75.9%	74.9%	77.9%
文系のみ	就職内定率	80.2%	—	—
	理系のみ	85.9%	—	—
新潟産業大学	就職内定率	82.2%	81.2%	87.3%
	就職希望率	79.1%	76.9%	92.6%

*: 全国の計数は、文部省・労働省共同調査による。

手スパー原信で住宅リフォームのチームリーダーを務めるOG古山さん（九八年卒）が人事担当者とともに来校。後輩たちも、このテーブルでは少し肩の力を抜いて大いに質問していた。ほとんどの企業の方から、「参加学生数が多く活気にあふれた実のある会だった。次回は体育館で」とうれしい評価と要望を頂戴した。

〇〇年度が変わり四月十二日、内田学長、樋口就職部長の新体制の下、新潟市のホテルイタリヤ軒に、県内外の人事担当者九十二名を招き、恒例の就職懇談会を開催。第一部では、学長の「新構想」と就職部長の「学生PRとお願ひ」、外部講師による「自分と部下を活かすストレスマネジメント」の講演を、第二部では人事担当者と本学教職員との情報交換会を行った。今回の参加企業の中にも、懐かしい卒業生の姿があった。大和工商リース新潟支店勤務のOB倉田さん（九五年卒）。「仲井川先輩（九三年卒）は東京支社ですすでに係長。後輩には是非来てほしい」と熱いエールを送られた。

新潟産業大学の先輩、前身の新潟短期大学、柏専学院の先輩が各方面で活躍され、後輩が後に続いてくれることを待ち望んでいる。

新任教員紹介

〔平成12年4月1日付け〕

学長 内田 安三

出身地／東京都

最終学歴／東京大学大学院工学系

応用科学博士課程(工学博士)

人文学部助教授

金光 林

出身地／中国吉林省

最終学歴／東京大学大学院総合文

化研究科比較文学比較文化専攻博

士課程修了(学術博士)

担当科目／ハンゲルI・II、環日

本海文化特論、現地研修(韓国)

各部署長の紹介

附属図書館長

鶴田 洋子(人文学部教授)

附属研究所長

金元 重(人文学部教授)

国際交流センター所長

坂東 淳悦(経済学部教授)

生涯学習センター所長

鍋田 英彦(経済学部教授)

教務部長

沼岡 努(経済学部教授)

学生部長

廣川 俊男(人文学部教授)

入試部長

山崎 一輝(経済学部教授)

就職部長

樋口 正昭(経済学部教授)

名誉教授の称号授与について

授与について

平成12年5月30日に本学元教授 荊木久彌先生へ本学名誉教授の称号が授与されました。

本学名誉教授規程に基づき選考され、平成12年4月19日開催の全学教授会で決定されました。

荊木先生は昭和38年に本学の前身である新潟短期大学から、長きに渡り教鞭をとられました。

在職中、附属図書館長、副学長、法人理事、評議員等学内要職を歴任し、平成8年4月には学長及び法人理事長に選任されるなど本学の発展に寄与され、今春、平成12年3月31日、学長任期満了をもって退職されました。

父母の会

新潟産業大学父母の会は、大学と家庭との連絡協調を緊密にすることを目的として発足して以来、様々な活動を行っています。

まず6月の総会では、学生部・教務部・就職部から大学の現況について詳細な報告が行われます。

昨年は引き続き留学生の舞踊と演奏や、卒業生の就職活動体験談を実施し非常に高い評価を得ましたし、貴重な情報交換の場として懇

親会にも多くの方が参加されました。

総会に出席できない方のため

に、秋には教職員が各支部に向向き大学の現況報告と質疑応答を行う支部総会があり、会報によって大学の現況を知ることでもできます。

また、学園祭時に行われる文化講演会は、著名な講師をお招きし会員や学生のみでなく、柏崎市民からも毎回高い期待が寄せられる行事として定着しています。

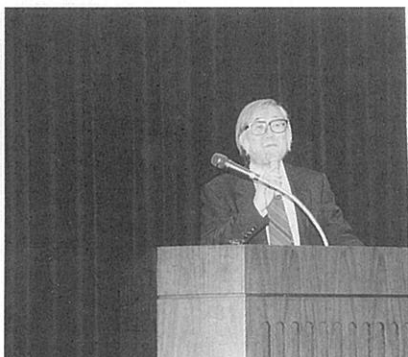
更に、昨年度は待望の「奨学金付金制度」が実現しました。これは指定期日までに学費の納入が困難な会員に融資する制度で、5名

の方にご利用いただきました。世相を反映しこの制度に対する問い合わせは多く、今年度は更なる利用が見込まれます。会員ならではの特典制度を充実すべく、今後は奨学給付金制度の導入に向けて審議を重ねる予定です。

この他にも学生生活の様々な分野に経済的支援を行っており、大学の発展のためには不可欠な存在となっている本会ですが、これからも会員の要望を取り入れて活動の充実を図り、大学と学生と家庭の絆を深めたいと考えています。

家庭のない家族 共に生きる平日

講師 小此



編集後記

人文学部助教授 海老澤 豊

最近マスコミで大学生の学力低下が大きく取り上げられている。分数の計算ができない、歴史に無

知だ、漢字が読めない、などと様々な科目の教員から現状を憂える声が上がっている。有識者はその原因として、小中高における

「ゆとり」の教育、日本人全体が教養を昔ほど尊ばなくなったこと、さらに耳の痛いことに大学入

試の科目削減を挙げている。また英語を第二の公用語にせよという意見もよく聞かれる。大学

でも実社会で役に立つ教育をすべきだという論調はますます増大している。つまり現在は学力の本質そのものが問われているのだと言えよう。

だが学力が教養主義的な色合いを持つにせよ、あるいは実践的な知識を指しているにせよ、一朝一夕では身につかないのは確かだ。古くさいようだが、地道な積み重ねしか学力を高めていく方法はな

い。

大学を取り巻く環境は、いよいよ厳しくなりつつあるが、本学は内田新学長のもと、教員と職員が一体となって、学生のために何が

できるかと摸索していきたい。